

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生高学年の部 最優秀賞

母の泣き笑い

鳥越小学校六年

山本 やまもと

暖 ひなた

母、四十四才。父の農業と祖父の旅館の手伝いをしている。よく笑い、よくおこる。今年から農業の手伝いを始めたこともあり、前よりもあわたましい毎日を送っている。

「もう、頭が回らない。としのせいだ。」

「体がついていけない。としのせいだ。」

と、何でもとしのせいにながらも動きまわっている。たまに、難しい宿題をみてもらおうとしたり、つかれているときに遊びにさそったりすると、これもまたとしのせいだからとかわしてしまふ時がある。

そんな母は、よく泣く。ある時は、私と弟に戦争に関する本を読み聞かせしていて、兄が妹を思いやる場面になると涙が止まらなくなり、続きが読めなくなった。ある時はテレビ番組を見て、男の人が、かべとかべに手と足をはりつけ、何度もすべり落ちそうになるのを必死でこらえ前に進んでいくのを見て、

「落ちるな。ふんばれ。」

と大きな声を出しながら泣いていた。だけど、どんな場面でも、私たちが母の泣いている姿に気づくと、母は「あはは」と笑ってみせそれ以上泣くことはないし、

「また、泣いとるん?。」

と聞けば

「としのせいやな。」

また、その答えで終わってしまう。

以前は、私の運動会や発表会などがあると「感動した」と泣いていた。

今もだが…。その時に理由を聞いた時、

「なんかわからんけど、胸が苦しくなつて涙が出てくるわ。」

と言ったが、ちゃんとした理由を聞きたくて、しつこく聞いていたら、

「あなたがお腹にいる時、仕事は忙しくて休めんし、お腹が痛くても不安になつても、聞いてほしいお母さんはいないし、じいじに言つたら心配するやろうと思うし、お腹をさすつては、がんばれ、一緒にがんばろ

う、ごめん、そう言つとたんや。」

と涙をうかべ話したのを思い出した。その時はいまい理由が分からず、そういう思いをしたんだなあと思つていなかったが、前におばに、母がお母さんを亡くした時、安定剤をうたれるくらい泣いたと聞いた。そして、それからは、どんなことがあつても泣かなかつた。がまんしていた涙はもう一ぱいになったのかもしれないと思つた。少しかたむくだけでこぼれてしまうんだ。

そういうえば、この間、私は左の薬指に切り傷をした。ちがう指を使おうとしても傷にあたり痛い。指全部で持とうとしてももちろん痛い。ふ段は何も感じなかったが、ちゃんと五本が必要なんだと思つた。一本一本が支え合っているのだ。支え合つてバランスをとつてきた母の家族は、母のお母さんが亡くなったことでバランスをくずしそうになったのかもしれない。母はきつと必死でバランスをたもとうと二人分ふんばつたんだ。みんなが不安にならないよう笑顔で二人分支えたんだ。弱音をはかずにいつも笑つていた母はどんな思いでがんばつてきたんだろう。たくさんをつらさ、悲しさ、不安をいだきたくさんのやさしさ、助けを人からもらい二人分以上の感情をもつてきたのか。笑顔でつらさをかくし、うまく泣けなくなつたんだ。

今日は、仕事のあい間に高校野球を見て大きな声で応援しまた泣き、笑いながら私に言った。

「あの、うれしそうな顔。どんだけうれしいやろ。苦しい思いをしてきたからやな。」

「ほら、あのくやしそうな顔。一しようにん命やつてきたがに、どんな思いをしとるやろ。」

そういうえば母の応援は、二つのチーム両方で、どの選手にも声をあげていた。たくさんのおいを知っているからこそ、どの選手にも、自分と重ねて応援しているのかもしれないと思つた。うまく泣けなかつた母は、アニメを見て、本を読み、スポーツを見て、どんなものにも自分の

思いと重ね、涙が出ていたにちがいない。

「ママ、もういいよ。泣きたい時は、おもいっきり泣けばいいんだよ。自分の思いを人の気持ちにうつして泣かなくてもいいんだよ。だって、もう二人分を支えなくても、私たちがいるじゃない。あれから、たくさん家族が増え、みんなで支え合ってバランスをとっていきようよ。」
私は心の中でつぶやいた。たよりない私たちではあるが、笑いながらも泣くようになった母は、少しは私たちのことをたよってくれているのだろうか。

四十四年間、たくさんのやさしさをもらい、ふんばった母の泣き笑い、としのせいかな、最高に輝いている。

